

ZINGIS
South Africa

[南アフリカ]

写真・文＝木下貴史(フォトグラファー)

DAY CAR

CENTRE

灯火の行方

と
も
し
び

5 6 7 8 9 10

E F G



マンデラの故郷、クヌ村にあるマンデラ博物館



弁護士でもあったマンデラが設立した黒人初の法律事務所(ヨハネスブルク)



マンデラの死後、期間限定で公開されたネルソン・マンデラ財団の本部(ヨハネスブルク)。マンデラが実際に執務していた部屋は、そのまま残されていた



終身刑を受けたマンデラが投獄されたロベン島(ケープタウン)の独房。1999年に世界遺産に登録され、現地ガイドの説明を聞きながら島内を巡ることができる

2013年12月5日、南アフリカから悲報が届いた。ネルソン・マンデラの死去。アパルトヘイト(人種隔離政策)の撤廃に不屈の精神で立ち向かった闘士は、享年95歳だった。人種間の平等の権利を訴え続け、27年にも及ぶ投獄から解放されたのは1990年。その4年後の総選挙では全人種の参政権が初めて認めら

れ、マンデラ率いるANC(アフリカ民族会議)が勝利し、大統領に就任した。人類に対する犯罪とまで非難されたアパルトヘイト。人口の約7割を占めた黒人に参政権はなく、基本的人権は否定され、住む場所も分けられた。一刻を争う病の時でさえ、白人用の救急車に乗ることは許

されなかった。残念ながら、南アフリカは人命より肌の色が優先される国だったのだ。そんな中、弾圧や投獄の末、勝ち得たアパルトヘイトの撤廃。対立と憎悪にまみれた国民に融和と和解を呼び掛け、国家再建に尽力し続けたマンデラの功績は、世界史に深く刻まれるべき偉業だ。



1962年、警察に尾行されていたマンデラが逮捕された場所(ハウィック)。現在はモニュメントが建てられ、観光名所になっている



かつて黒人が携帯を義務付けられていた身分証のパスは、アパルトヘイトの象徴だ

アパルトヘイト時代に使われた白人専用のベンチが展示されているクムール博物館(ダーバン)。当時、駅や役所の入り口に掲げられた「WHITES ONLY」の看板も



空き地でサッカーをしていた子どもたち。カメラを向けるとポーズをとってくれた

規模の旧黒人居住区「ムダンザーネ」がある。そこで目に飛び込んでくるのは、バラック小屋の連なる風景だ。政治的解放は達成したものの、黒人の多くはまだ困窮を極めたまま。貧困からの解放はほど遠い。マンデラはそんな黒人の貧困や劣悪な住環境からの脱却に着手したが、その実

約2年ぶりに南アフリカを訪れた私は、マンデラが埋葬された東ケープ州のクヌ村に向かった。自国の英雄を失って村人たちは動揺しているのかと思っていたけれど、みな冷静だった。「天国でゆっくり休めばいい」。この村で暮らす黒人の中年男性はそう話した。

現はまだまだ先だろう。夕暮れ時、灯火のない荒れ地に広がるバラック小屋は、暗闇にのみ込まれていった。まるで、現実の重さに押しつぶされてゆくようだ。マンデラの無念の象徴ともいえる課題に、この国の人々はどう立ち向かっていくのだろうか。

もちろん、彼の死は悲しい。しかし、この国の安定を望みながら長寿を全うしたマンデラの献身と勇姿は、永遠に色あせることがない。大統領退任から、すでに15年の歳月が流れている。クヌ村から南へ200キロ、イーストロンドンには、国内で2番目の



ムダンザーネに沈む夕日。この地区の人々にとって電気はまだ高価だ

地球ギャラリー vol.70



制服を着たクヌ村の小学生。黒人の義務教育の達成は、マンデラの悲願だった



クヌ村の羊飼い。この村の人にとって、牛や羊は貴重な財産だ



マンデラが幼少期を過ごし、埋葬されたクヌ村には、今も牧歌的な風景が広がっている



ムダンザーネにひしめくバラック小屋。各家庭に水道がないため共同水栓を使う

部族をまとめる存在といえば

地区長



特別席のマシティ先生(右)。最初は席を覆うように幕が下ろされ、姿は見えない

「僕、ロイヤルファミリーの一員なんだ」

ムプマランガ州の職業訓練校で木工技術を教えているマシティ先生がそう言った。南アフリカには大きく分けて9の部族があり、彼は北部に多いベンダー族の出身。最近、地区ごとに存在する部族のリーダー、“地区長”に就任した。

その就任式は盛大だった。だっ広い空き地に集まった何百人もの人に迎えられ、マシティ先生は幕で覆われた特別席へ。広場の中心では、太鼓のリズムに合わせて女性たちが



女性たちが手足をすばやく動かす伝統的なダンスを披露

祝いのダンスを踊り、笛を持った男性たちは列を組み、ぐるぐると円を描いて行進する。そうして数時間たったころ、やっと特別席の幕が取り払われ、とうとうマシティ先生のお披露目。就任の宣誓をした瞬間から、晴れて地区長の誕生となる。

地区内で牛が盗まれたり土地を争ったりと、トラブルが起きた時は彼の出番。双方の話を聞き、けんかにならないように収めるのが仕事だ。教員と地区長、二足のわらじを履く彼は、「地区長に選ばれたことは私の誇りです」と笑顔を見せる。



他の地区長たちに見守られながら、聖書を手に宣誓

取材協力：株式会社RIOM international trading

地球ギャラリー

南アフリカの文化を知ろう!

多様な部族と、ヨーロッパやアジアからの移民が共存する南アフリカ。世界各地の伝統料理が融合し、この国ならではの新しい味を楽しめるのが特徴だ。例えば、「パニーチャオ」は、食パン一斤の中身をくり抜き、インドカレーを入れた一品。食パンに染み込んだスパイスたっぷりの辛さが病みつきになる。

ヨーロッパのソーセージを、東南アジア産のコリアンダーなどでアレンジしたのが「ブルボス」。南アフリカでは「ブラーイ」と呼ばれるバーベキューの具材の定番だ。肉を粗くひくため硬く、しっかり食べ応えがある

のが特徴。この食感と、スパイスの香りが人気の秘密だという。1メートルものソーセージを渦巻き状にして焼くことも多い。

東京・新宿にあるアフリカン・バル「トライブス」のブルボスは、南アフリカ政府公認の本場の味。商社マンとしてアフリカに駐在していたオーナーの石川邦彦さんが、「料理を食べながら、アフリカで体験したことを楽しく話したい」と始めたお店だ。南アフリカはもちろん、アフリカ各国の料理やワインも豊富にそろい、いつもと一味違う夜を楽しめる。

南アフリカ料理といえば スパイスたっぷりの 肉厚ソーセージ

ブルボス



【RECIPE】

●材料(3人前)

牛肉400g/マトン肉200g/豚腸/タマネギ4分の1個/トマト1個/コリアンダー30g/オールスパイス6g/クローブ・ナツメグ各3g/塩30g/コショウ10g/砂糖6g/赤ワイン80cc

- 1 牛肉とマトン肉を粗くひき、スパイス、赤ワインと混ぜたら、一晚寝かす。
- 2 ①を豚腸に詰める。ソーセージスタッファーや絞り袋などを使うと簡単。
- 3 フライパンで②を焼く。
- 4 ③で出た肉汁でみじん切りにしたタマネギ、トマトを炒めてソースを作り、かけたら出来上がり。

【SHOP INFORMATION】



トライブス

〒160-0007
東京都新宿区荒木町7-14
AXAS四ツ谷三丁目101
TEL:070-5366-0092
営業時間：17～24時(土曜は23時まで)、日曜・祝日定休
URL:www.tribes.jp/